

近世竹田における城下町設計の論理

金井 雄太¹・福井 恒明²

¹非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻（〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1,
E-mail:kanai@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

²正会員 博士（工） 東京大学大学院工学系研究科（〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1,
E-mail:fukui@csur.t.u-tokyo.ac.jp)

近世に岡城の城下町として建設された大分県竹田には、城下町の町割の大部分が現在まで残っている。この竹田において、絵図および文献から、設計論理の解明を試みた。城下町建設以前の土地利用、街区や屋敷割、城下町の変化などを分析・考察した結果、竹田城下町は巨視的に見れば他の城下町と同様の基盤の目の構造を取りながら、細部は微地形や水系などに則した設計がなされていたことがわかった。また、厳しい地形的制約の中で城下町を拡大するため、周囲の農地を城下町に組み入れる、寺院を城下町外へ移転させてその跡地を利用する、城下町そのものを拡大する、などの手法が採られていたことがわかった。

キーワード：城下町設計、竹田、岡城、微地形

1. 序論

(1) 研究背景・目的

大分県竹田は、近世に岡城の城下町として建設された都市であり、江戸時代当時の町割の大部分が現在でも残っている。当時の建物はほとんど建て替わっているが、それでも町全体の構造や街路、そのたたずまいに当時の雰囲気を感じる事ができる。

本研究では、竹田城下町について、その設計論理を解明することを目的とする。

(2) 対象

本研究では、竹田城下町を対象として選定した。これは、実際に都市計画に関する議論が起こっているという点、および山城の城下町としてその構造が現代まで色濃

く残っていると思われるという点が主な理由である。また、山城の城下町に対する研究は蓄積が少ないという点も理由として挙げられる。

竹田は、大分県の南西部、標高235m程度に位置する、岡城の旧城下町である。北側に稲葉川が流れ、周囲を280m～300m程度の高地が取り囲む盆地の地形を成している。また、山城である岡城から1km程度離れた位置に立地しているという点が城下町としては特徴的である。

その中で、対象地域として、竹田を描いた江戸時代の各種絵図において、城下町として描かれている範囲を設定した。竹田を描いた絵図は数多く残されており、それぞれの絵図によって描かれている範囲は異なるが、概ね図-2で示した範囲を対象範囲としている。

竹田市史¹⁾および大分県史²⁾の記述を総合すると、岡城は天文期(1532～1554年)から、この地方の有力者であった志賀氏によって本格的に軍事拠点として利用され始めたようである。その後、1594年に中川秀成が播磨国三木城から移封され、その手によって竹田に城下町が建設されたとされる。その後約300年間にわたり、岡藩主であった中川氏の施政下に置かれ、城下町として発展していった。明治初期の西南戦争において戦場となって戦災を受けたものの、以後は太平洋戦争なども含め大きな戦災の被害を受けることはなく、また城下町全体に壊滅的な被害を与えるような災害に見舞われることもなかった。

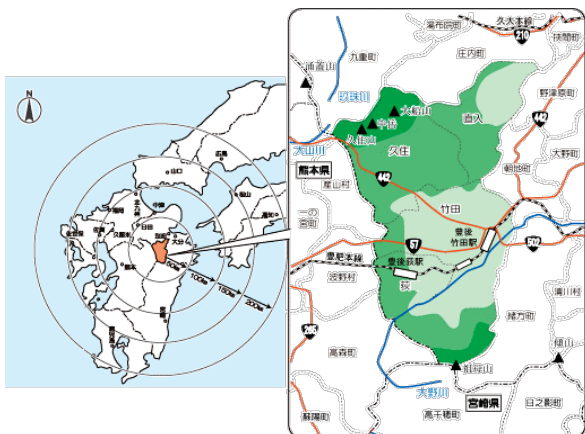


図-1 竹田の位置図（竹田市ホームページより引用）

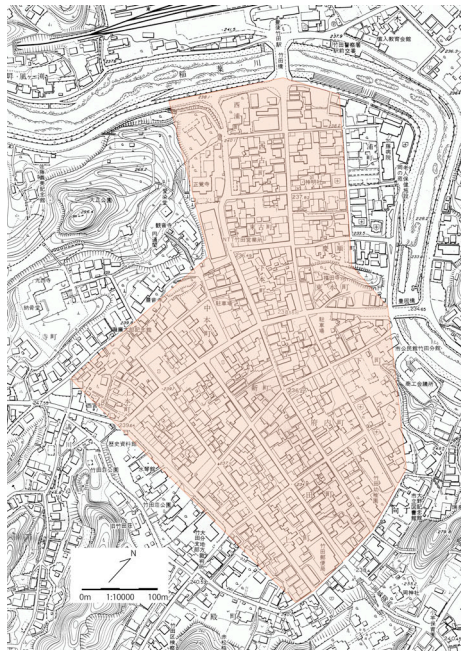


図-2 対象地域（「竹田市白図」に加筆）

鳥養の研究³⁾および絵図などから判断すると、明治以降城下町の内部と外部とをつなぐ街路は数多く新設されているが、対象地域である城下町内において新たな街路が引かれた記録はないため、城下町内の街路構造は城下町当時から大きくは変化していないものと考えられる。

(3) 既往研究および本研究の位置付け

城下町の研究にはこれまでに多くの蓄積があり、足利⁴⁾や矢守⁵⁾、阿部ほか⁶⁾、池田ほか⁷⁾⁸⁾の研究などの例が挙げられるが、これらはいずれも、城下町の内部に城郭が位置するというスタイルを取る平城の城下町を主な対象としている。本研究で対象とする竹田は城郭が城下町と離れた位置に存在している山城の城下町であり、対象が異なっている。

また、竹田に関する研究としては、志水ほか⁹⁾による城郭と城下町との位置関係に関する研究、九州大学文学部地理学研究室¹⁰⁾による武家屋敷・町人地・商業および祭祀・イメージマップの分析、鳥養¹¹⁾による明治期以降の交通インフラに関する研究が挙げられる。しかし、これらはいずれも城下町的设计論理には言及していない。

本研究は、山城である竹田城下町的设计論理を分析・解明するものであり、他の既往研究とは異なる独自の研究となっている。

2. 分析手法・視点および分析資料

(1) 分析手法・視点

本研究では、街路などインフラ整備の側面から、何を優先させ、どのような過程で町割が行われたのかという、

城下町的设计論理を竹田において解明することを目的としている。その目的のために、本研究において行う分析の手法および視点についてここで説明を行う。

本研究における研究手法は、既往の城下町に関する研究、特に先述の阿部ほか⁶⁾、池田ほか⁷⁾⁸⁾の研究において用いられた、近代測量図に基づいて街区や街路の寸法を測定し、さらに水路網や開発過程などを考慮しながら城下町设计の論理を解明するという手法を基礎としている。しかし、竹田には近代測量図が存在しないため、全く同一の手法を取ることは困難である。

そこで、竹田城下町の分析に用いる事ができる資料として、絵図に着目する。竹田には多くの絵図が残されており、その特徴も様々である。その中には、数値の精度については測量図には劣るものの、屋敷割の寸法が記入された絵図（旧竹田市街圖）が存在している。この絵図の分析を行うことによって町割や屋敷割の大きさや寸法については近代測量図に準じた分析を行うことができるものと考えられる。しかし、正確な測量地ではないので、絶対的な位置情報についてはこの絵図からも読み取るのは困難である。

また、地図としての正確性を明らかに欠いた、いわば模式図のような絵図（豊後国直入郡岡城絵図）も存在している。このような絵図は、上記のような分析に用いる事は出来ないが、その絵図が描かれた背景などから、設計論理に関する情報を得る事ができる。

さらに、絵図を分析するだけでは、絵図が描かれたある時点における城下町の分析しか行うことができないので、城下町の経年変化について考察を行うために、文献資料に対する分析を行う。

分析の視点は、以下の①～⑥の通りである。

① 城下町建設以前の竹田

まず、対象地域における、城下町建設以前の地形及び土地利用について分析する。城下町形成以前に描かれた絵図は現在のところ発見されていないため、文献に残された記述に基づき推測を行う。

② 城下町の全体構造および周囲の地形との関連

城下町の全体構造について、絵図に基づき整理を行う。また、対象地域の地形的特性、および地形と街路・街区との関係性を調べる。

③ 街路の優位性

屋敷が間口を向けている方向を調べることで、2つの街路が交差する地点でどちらの街路が優先されたか、すなわち城下町内でどの街路が「格が高い」街路であったかを分析する。また、城下町の外の街道筋との関係についても整理する。

④ 屋敷割の寸法

街区内の屋敷割を、特に間口および奥行きの寸法に着

目して分析する。同時に、他の城下町における屋敷割寸法との比較も行う。

⑤ 城下町の経年変化

描かれた時代が違う絵図を比較し、城下町がどのように変化（拡大）していったかを分析する。また、文献における記述を整理し、裏付けを行う。

⑥ 城下町の街区寸法

絵図に記載された寸法を集計・換算し、現在の街区寸法と比較することで、街区・街路の変化を整理する。

(2) 分析に用いた資料

a) 文献資料

- ・賀川光夫監修：竹田市史(中巻)，竹田市史刊行会，1984
- ・大分県総務部総務課編集：大分県史(近世篇I)，大分県，1983
- ・大分県総務部総務課編集：大分県史(近世篇IV)，大分県，1990
- ・竹田市教育委員会編集：中川氏御年譜(年譜)，竹田市，2007
- ・岡村香村：竹田奇聞(上)，竹屋書店，1976
- ・岡村香村：竹田奇聞(下)，竹屋書店，1976
- ・村松幸彦・野村瑞典監修：竹田の寺，岡の里事業実行委員会，1994

b) 絵図

- ・旧竹田市街圖(複写)(竹田市立図書館蔵)：不詳
安部伊八郎氏蔵の絵図「旧竹田市街圖」を昭和47年(1972)2月に竹田中央公民館にて複製したものであり、街路や屋敷割が寸法(表口・入)まで含めて記されている。

作成年代は不明であるが、「光西寺」(1647年に円龍寺から改称¹²⁾¹³⁾が存在していること、「正覚寺」(1666年移転¹⁴⁾)が移転する以前であることから、1647年～1666年の間に作図されたものと考えられる。

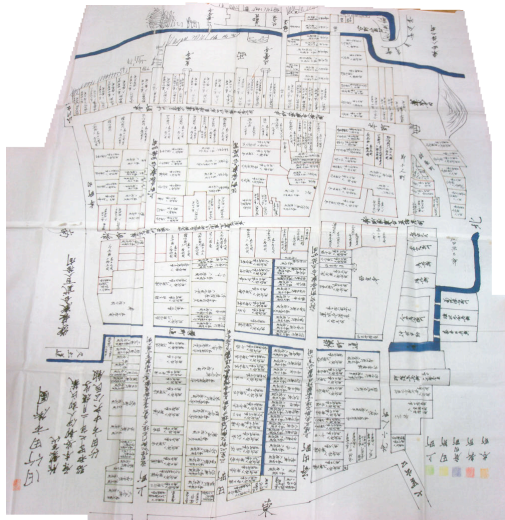


図-3 旧竹田市街圖

- ・豊後国直入郡岡城絵図〔正保年間〕：1647

中川氏御年譜に1647年作図との記述がある¹⁵⁾ことから、藩の主導で描かれた絵図であることがわかる。他の絵図や現況の地図と比較すると、かなり模式的に描かれている。

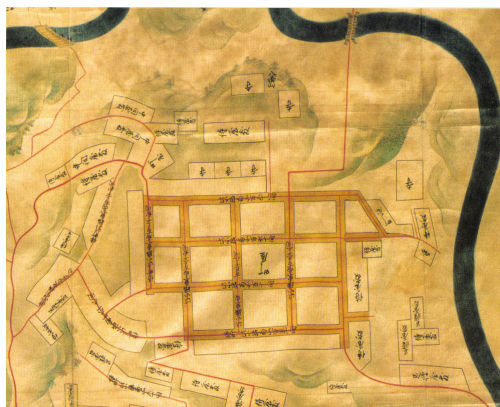


図-4 豊後国直入郡岡城絵図

- ・城中より各屋敷への道順：不詳

作成年代は不明であるが、「旧竹田市街圖」と同様の考察が成り立つので、同じく1647～1666年頃の作成と推察される。城下町内の街路および寺院、武家屋敷が描かれている。



図-5 城中より各屋敷への道順

- ・岡城々下家中図：1783・1795

同じタイトルの絵図が2枚存在し、1枚は天明3年(1783)，もう1枚は寛政7年(1795)作成である。内容には若干の差異があるものの両者は概ね同様の絵図であり、城下町を含む岡城周辺の道筋および武家屋敷の位置と名前が描かれている。

- ・岡藩士屋敷配置図〔文政年間〕：1818～1829

作成年代は1818～1829年である。「岡城城下家中図」とほぼ同内容であるが、こちらの絵図は武家屋敷の位置のみでなく屋敷割も含めて描かれている。

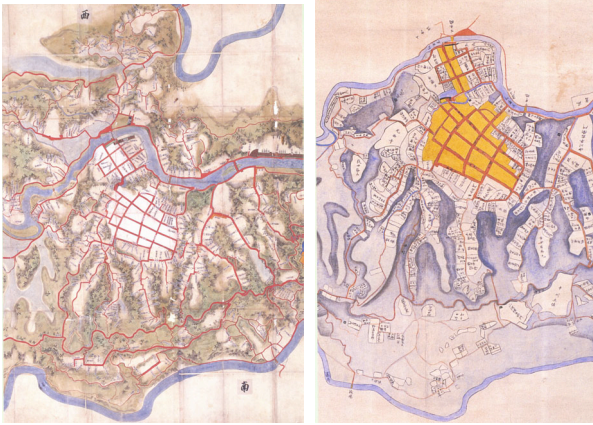


図-6 (左) 岡城々下家中図〔天明3年〕

図-7 (右) 岡藩土屋敷配置図

・竹田町図：不詳

「上町・横町」「本町・魚町・新町通」「寺町・新小路通」「本町・寺町通」「上町・田町通」「府内町通」「古町通」の計7枚からなる。作成年代は不明であるが、後述する「總町繪圖面」と内容がほぼ同じであることから、近い年代に作成されたものと思われる。城下町の屋敷割が、各辺の寸法も含め描かれているが、一部欠落している部分があり、城下町全体をカバーしてはいない。

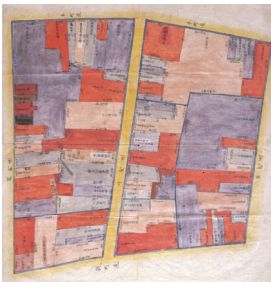


図-8 (左) 竹田町図 (上町・横町)



図-9 (右) 竹田町図 (本町・魚町・新町通)

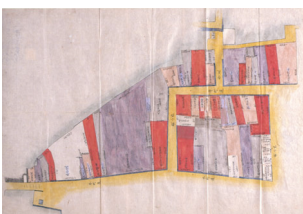


図-10 (左) 竹田町図 (寺町・新小路通)



図-11 (右) 竹田町図 (本町・寺町通)



図-12 (左) 竹田町図 (上町・田町通)

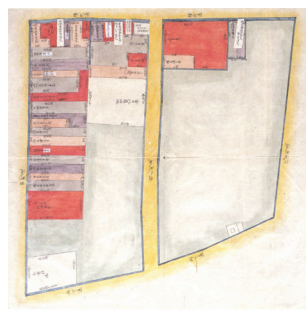


図-13 (右) 竹田町図 (府内町通)

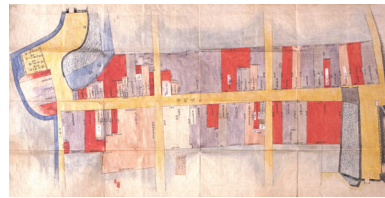


図-14 竹田町図 (古町通)

・總町繪図面：1869

明治2年(1869)作成である。城下町全体にわたって、詳細な屋敷割が描かれている。



図-15 總町繪圖面

※なお、旧竹田市街圖以外の絵図はすべて、大分県竹田市発行の「竹田区域街並み環境整備方針策定報告書（資料編）」を出典としている。

(3) 城下町の形成

「中川氏御年譜」に記載されている、城下町の形成過程および大火などによる被災状況をまとめると、表-1のようになる。

表-1 竹田城下町の形成過程

1593 (文禄 3)	中川秀成入部
1593 (文禄 3)	城下町町割
1619 (元和 5)	竹田上町より出火、町屋過半数・土屋敷類焼す
1664 (寛文 4)	古町出来
1666 (寛文 6)	殿町より出火、竹田町焼失、御客屋も類焼
1667 (寛文 7)	正覚寺・大勝寺・光西寺が寛文6年大火により移転し、跡地に御客屋が田町から移転
1679 (延宝 7)	西光寺が小人町(代官町)から下木に移転
1709 (宝永 6)	殿町より出火、内町過半町・近辺の家中屋敷多数焼失

1713 (正徳3)	竹田町鍛冶屋より出火, 町内残り鮮やく, 御客屋も類焼
1789 (寛政元)	岡城下より出火, 内町は残らず町近辺の家中屋敷数多焼失
1790 (寛政2)	岡城下本町より出火, 西風烈く大火に及び, 内町は残らず御城内外家中屋敷, 谷々小路小路大半焼失
1806 (文化3)	寺町御客屋, 寛政元年竹田町大火の節類焼のところ, 御普請際成就
1843 (天保14)	岡市中大火 この時の大火は古町, 寺町を残し鎮火した
1846 (弘化3)	西光寺出火
1864 (元治元)	岡府内町より出火, 市中過半焼失す

3. 分析

(1) 城下町建設以前の竹田

竹田市史¹⁶⁾および竹田奇聞(上巻)¹⁷⁾の記述から, 城下町建設以前の土地利用について以下の事項が推察される。

- ・対象地域西南部の稲荷谷から流れる慶順川と, 南部の久戸谷から流れる久戸川の2河川が対象地域内に存在していた。
- ・城下町形成以前の対象地域は水田地帯であり, 「西南・東部の山付き」(竹田市史)・「今の山川あたり」(竹田奇聞)に民家(農家)が点在していた

2つの小河川の位置は, 文献記述と現況の都市下水網とを照らし合わせると, 現在の都市下水道八幡川・下町川の位置とほぼ一致していると考えられる。ただし, 城下町建設の際に, 池を造成したり, 流路を街路に合わせるなどの造成が行われたことが絵図から読み取れるため, 現在の都市下水の流路と自然の流路とは若干の違いがあると考えられる。

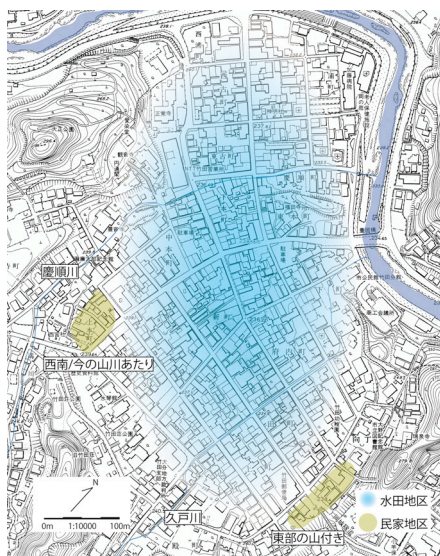


図-16 城下町形成以前の対象地域 (竹田市白図に加筆)

また, 民家の位置については, 現代の地名などを考慮すると, 竹田市史における「(城下町の) 西南」と竹田奇聞における「今の山川あたり」は同一の地区を指すと考えられる。

以上の分析に基づくと, 城下町建設以前の竹田の土地利用は, 図-16のようであったと推察される。

(2) 城下町の全体構造

現状の地図(図-2)や, 明治初期に描かれた總町繪圖面(図-15)を見ると, 城下町でしばしば見られる碁盤の目状の町割となっている。しかし, 細部を見ると, 街路同士が直交していなかったり, 曲線で引かれている街路があるなど, やや歪な構造となっていることがわかる。

ここで, 城下町が建設されて初期の, ほぼ同時期に描かれた「旧竹田市街圖」(図-3)と「豊後国直入郡岡城絵図」(図-4)とを比較すると, 「旧竹田市街圖」では現在と同様歪な町割が描かれているが, 「豊後国直入郡岡城絵図」では街路同士が直交するように描かれている。「豊後国直入郡岡城絵図」が藩の主導で描かれたものであることを考慮すると, 竹田城下町を碁盤の目状に町割しようという意識があったということがうかがえる。

(3) 街路の優位性

先述の矢守による研究など, 城下町に関する既往研究において, 交差点における間口の方角に注目しているものがある。本研究では, 交差点において宅地が間口を向けている街路を「格が高い」, 側面を向けている街路を「格が低い」と定義し, 街路の「格」について検討する。

各交差点において, 宅地が間口を向けている街路を赤で示すと, 図-17のようになる。

全体を通して見ると, 本町通り(図-17 A), 新町通り(図-17 B), 上町通り(図-17 C)などの通りに間口

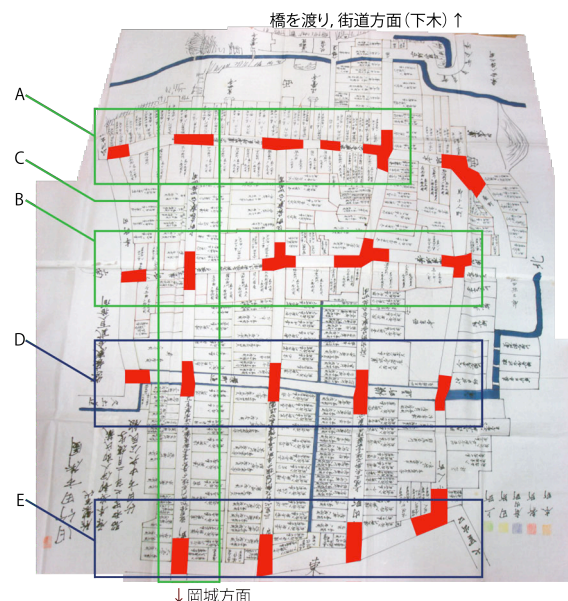


図-17 交差点における間口方向 (旧竹田市街圖に加筆)

を向けている場合が多い。特に、本町通り上の5ヶ所の交差点においては、すべての宅地が本町通りに間口を向けている。また、上町通り上の4ヶ所の交差点においては、本町通りとの交差点以外の3つの交差点においてすべての宅地が上町通りに間口を向けており、「格が高い」と言えるだろう。これらの街路は、岡城から城下町を通り、稲葉川を渡って街道へ向かう際の経路ともなっていたと考えられ、交通上重要な街路であるので、格が高く設定されていたものと思われる。

一方、横町通り（図-17 D）や向町通り（図-17 E）については、端部を除くすべての交差点で宅地が間口を向けていなかった。このことから、これらの通りは「格が低い」通りだったと判断できる。

(4) 屋敷割の寸法

「旧竹田市街圖」に記載された入（奥行）・表口の寸法を集計すると、それぞれ図-18・図-19で示した通りとなる。入（奥行）については、12間～13間が大多数を占めていることがわかり、これが竹田における標準的な宅地寸法であったと考えられる。一方、表口（間口）については、3間～4間が最も多いものの、入（奥行）のような一定の傾向を見出すことはできなかった。

また、竹田と同時期に建設された他の城下町を見ると、

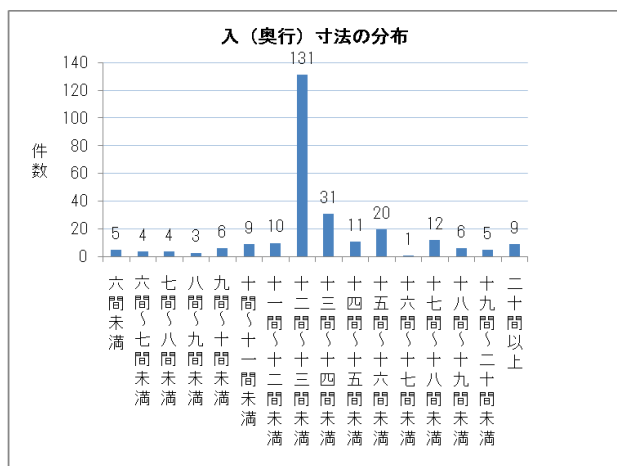


図-18 入（奥行）寸法の分布

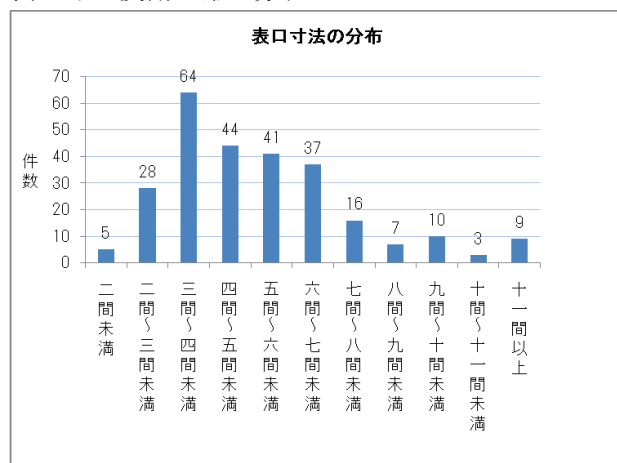


図-19 表口寸法の分布

1585年に建設された大和郡山で宅地奥行12間¹⁸⁾、同年の大坂（上町）で13～14間¹⁹⁾など、12間程度の宅地奥行を取る城下町が多く存在していることから、竹田においても当時の一般的な城下町設計の形式にならって設計が行われたものと考えられる。

(5) 城下町の変遷

2. (3)で見たとおり、古町は城下町建設当初は城下町としては扱われていなかった。図-20に示した「豊後国直入郡岡城絵図」のAの地区が古町であるが、この絵図の時点では町割されていなかったことがわかる。図-21の「旧竹田市街圖」では、図の範囲にも含まれていない（図-21 A）。しかし、そこに自然発生的に町屋が立ち並び始め、1664年までに城下町に加えられており、「岡城々下家中図」（図-22 A）では町割が書き加えら

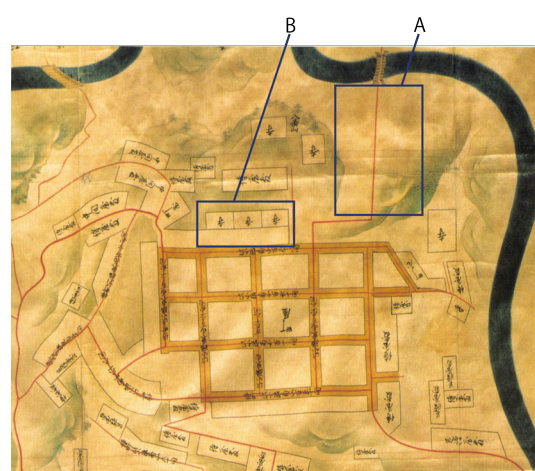


図-20 豊後国直入郡岡城絵図における古町・寺町の表現

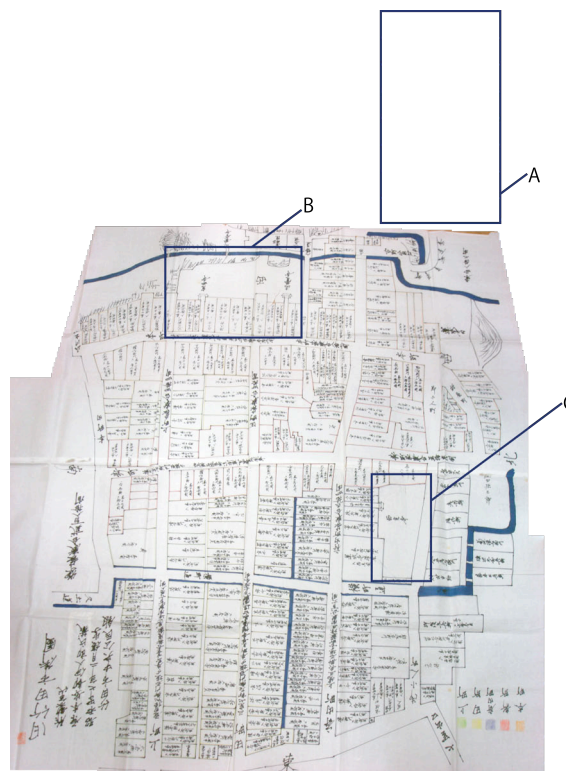


図-21 旧竹田市街圖における古町・寺町・西光寺の表現

れている。なお、古町の町割は城下町の他の地区と異なり、ほぼ正方形に町割されていることがわかる。

また、寺町は、「豊後国直入郡岡城絵図」および「旧竹田市街圖」では寺があるのみで町割されていないが（図-20 B・図-21 B）、「岡城々下家中図」では町割されている（図-22 B）。中川氏御年譜²⁰⁾や竹田の寺²²⁾の記述も合わせて考えると、1666年の大火の後に寺が城下町外に移転し、町割されたものと考えられる。寺町ではないが、御小人町に位置していた西光寺（図-21 C）も1679年から1682年にかけて城下町外へと移転している²³⁾。

(6) 城下町の街区寸法

「旧竹田市街圖」に記載されている表口の寸法を足し合わせる事で、城下町当時の街区の寸法を算出し、単位をmに換算して図-29に示した。また、現況の街区の寸法を地図上で測定し、上記の結果と比較したのが図-24である。

絵図に記載された寸法は正確なものではないと考えられるため、現況の数字と厳密に比較して議論を行うことは困難である。数値が異なっている理由として、実際に街区の寸法が変化した可能性の他、測定時の誤差や丸め誤差などの可能性も考えられる。しかし、数値の違いが明らかに誤差の範囲を超える程度であれば、街区寸法そのものに変化があったと考える事ができる。ここでは、10%を一つの基準とし、10%を超えるような数値の差が見られる場合には、少なくともその街区には寸法の変化があったものと考えて考察を行う。

なお、九州大学文学部地理学研究室²⁴⁾による既往の研究に基づき、寸法の換算は京間（一間＝六尺五寸＝1.97m）として計算している。

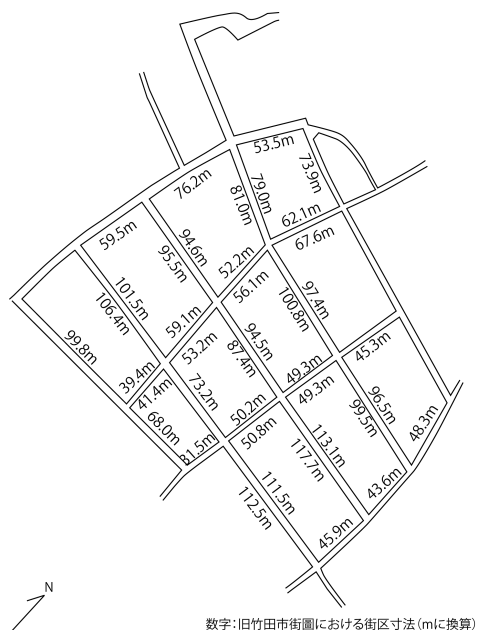


図-23 「旧竹田市街圖」における街区寸法

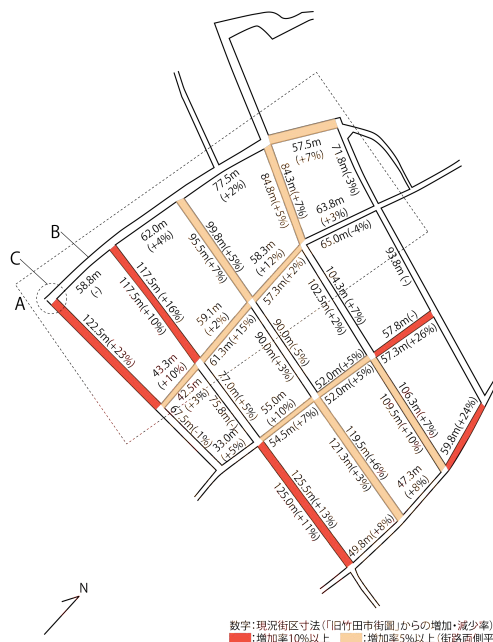


図-24 現況の街区寸法および「旧竹田市街圖」における街区寸法からの変化

図-24 Aの部分において、東西方向の長さの変化が南へ行くほど大きくなっていることがわかる。このことから、旧来は本町通り（図-24 B）は現在より東側を通っていたが、街路の位置が付け替えられたのではないかという仮説を立てることができる。その仮説を図で示すと図-25の通りとなる。

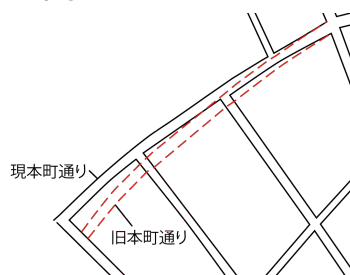


図-25 街路の付け替え仮説

さらに、1647～1666年作成の「旧竹田市街圖」と、明治に入ってから描かれた「總町繪圖面」では、図-24 Cの交差点の描かれ方が異なっており（図-26・図-27）、「旧竹田市街圖」では本町通りが突き当たるように描かれているが、「總町繪圖面」では本町通りがそのまま城下町外まで抜けている。この描かれ方の違いが街路の付け替えに起因するものだと考えることができる。

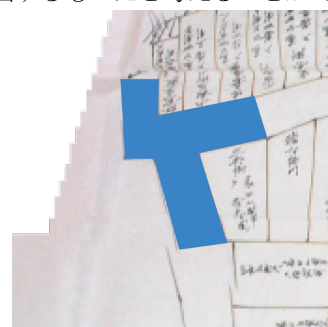


図-26 交差点形状（「旧竹田市街圖」（1647～1666）抜粋・加筆）

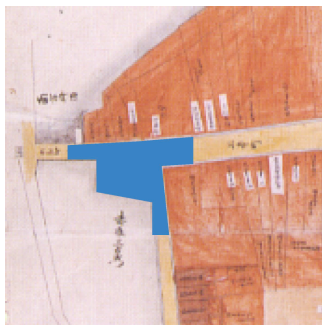


図-27 交差点形状（「總町繪図面」（1869）抜粋・加筆）

4. 考察

(1) 城下町設計の論理

山城である岡城周辺は必然的に山がちな地形であり、城下町を建設するのに必要な広さを持つ平地は限られる。そのような中で、岡城に移封された岡藩初代藩主中川秀成は、城下町に近く、比較的広い平地が存在している竹田に城下町を建設することを決めたものと思われる。

ただし、3. (1)にあるように竹田は城下町建設以前は湿地地域であり、近年に至るまで度々水害に見舞われるような土地であるので、必ずしも城下町に適した土地ではなかったはずである。

そのような場所にどのような城下町を設計し建設したか、ということを考えると、まず3. (2)で見たように、竹田城下町を他の城下町と同様の基盤の目状に整備しようという方針があったと考えられる。また、3. (4)で見た通り、屋敷割の奥行寸法は当時の他の城下町に近い値となっていたこともわかっている。これらを総合すると、他の城下町にならった構造の城下町を建設しようとしていたことがうかがえる。

しかし、それぞれの街路を細かく見ていくと、必ずしも街路同士が直交していなかったり、街路が曲線になったりと歪な町割になっている、というのも3. (2)で見た通りである。

ここで、3. (3)において分析した街路の「格」に着目しながら街路の配置と微地形との関係を見ると（図

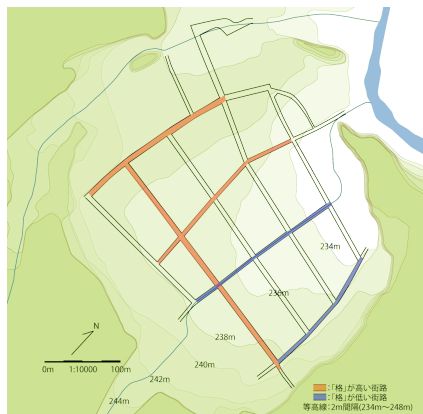


図-28 街路と微地形との関係

-28) , 「格」が高い街路は、周辺より一段高い微高地など、比較的水害に遭いにくいと思われる位置に通されていることがわかる。一方で、「格」が低い通りは、川に沿う形で引かれており、水害に遭いやすかったものと思われる。

以上のことから、城下町において中心的な街路をできるだけ水はけがよく、水害にも遭いにくい場所に立地させるために、大枠の構造は基盤の目状を保たせながら、それぞれの街路の位置を決めていったということだろう。そのため、水田しかなかったような平地に一举に城下町を建設したにもかかわらず、街路は曲線を描いたり、交差点が直交しないなど、歪んだ町割となったものと思われる。

つまり、巨視的な視点では、当時の城下町で一般的な基盤の目の構造の城下町を建設しようとしながらも、一方で微視的な視点では、自然条件に合わせて街路の配置を決定していたということが示唆される。

(2) 城下町の拡大

次に、城下町の範囲について考察する。特に竹田は、周囲を高地に囲まれており、その高地を越えて既存の街区の外側に新たな街区を配置するような城下町の拡大手法を取ることは困難であったはずである。そのような中で、どのように城下町の規模を拡大していったのかを考察する。

2. (3)および3. (5)で示した通り、城下町建設当初は古町は城下町とはされていなかった。しかし、城下町の発展と共にその範囲が拡大した結果、城下町の外であるはずの古町にも1630年前後から町屋や武家屋敷が立ち並び、1664年には城下町として完成している。つまり、まずは城下町に隣接する農地を城下町内に取り込むことで、城下町の拡大を図ったものと思われる。

この古町地区は、城下町の他の地区と異なり、ほぼ正方形の町割がなされている。これは、古町には小河川が流れていなかったことから、水害に対する配慮をする必要がなかったためではないかと考えられる。

さらに、旧来は城下町内に位置していた寺院が1660年代以降相次いで城下町外に移転し、跡地は町割された上で町人屋敷が建てられている。このことから、古町に進出してもまだ城下町内の土地が不足したため、寺院を城下町外に移設し、その跡地を町人地として利用したのだと考えられる。

また、3. (6)で示したように、1647～1666年当時は、特に城下町周縁部において街区は現在の街区より小さかったことが推察される。どのような方法で街区が広げられたのかは明らかではないが、周縁部の街区が広がっていることから、寺院の移転による跡地利用を測ってもなお城下町の土地が足りなかったため、周縁部に向かっ

て可能な限り街区を拡げていき、さらに宅地面積を増やしたのではないかと推測することができる。必要に応じ、高地の裾の崖の部分の一部削り取るなどの手法を取った可能性もある。

このように、厳しい地形的制約の中で、いかに限られた平地を有効に利用して城下町を広く作ろうとしたかをうかがい知ることができる。

5. まとめ

(1) 本研究の成果

本研究の成果は、以下の通りである。

- ・竹田城下町において、非合理的に見える歪な町割の中に、「巨視的に見ると他の城下町と同様の基盤の目構造としながら、細部は自然地形を考慮している」という設計論理が働いていることを示唆した。
- ・周囲を高地と山に囲まれているという地形的制約の中で、城下町を発展と共に面積的に拡大させるために、竹田においては、まず周囲の未利用地域を城下町内に取り込み、次に城下町内の寺院を移転させてその場所を宅地化し、さらに城下町そのものを拡げるという手法を取ったということを推測した。

(2) 今後の展望

本研究では取り上げなかったが、城下町内には街路に沿う形で多くの水路がめぐらされていたことが絵図からわかっており、その一部は、道路の側溝などに形を変えながらも現存している。この水路のネットワークを解明することで、微地形に対する分析を行うことができるので、地形と町割との関係についてさらに詳しい考察を行うことができると考えられる。

また本研究では、3.(6)において、街区の寸法のみに基づいて分析を行っているが、絵図の幾何補正などを用いる事により、さらに厳密に街路、街区、宅地などの配置を明らかにすることができれば、街区の拡大による城下町内の宅地範囲の拡大についてさらに厳密な考察が可能になると思われる。

謝辞：本研究の資料調査において竹田市役所の宮成公一郎氏、武内公司氏、安達豊氏、渡辺一宏氏、竹田市立図書館の本田耕一氏、竹田市立歴史資料館（当時）の中西義昌氏には多大なご協力を頂いた。厚く謝意を表する。

参考文献

- 1) 賀川光夫監修：竹田市史(中巻)，pp. 17-18，竹田市史刊行会，1984
- 2) 大分県総務部総務課編集：大分県史(近世篇I)，pp. 433-434，大分県，1983
- 3) 鳥養孝好：旧城下町竹田の隧道，史学論叢，第28号，

pp. 19-48，別府大学史学研究会，1998

- 4) 足利健亮：中近世都市の歴史地理，地人書房，1984
- 5) 矢守一彦：城下町のかたち，筑摩書房，1988
- 6) 阿部貴弘・篠原修：江戸における城下町中心部の都市設計，土木学会論文集，No. 632/IV-45，pp. 63-76，土木学会，1999
- 7) 池田佳介・阿部貴弘・篠原修：近世城下町大坂の船場・島之内地区における城下町設計の論理，土木史研究，21巻，pp. 13-24，土木学会，2001
- 8) 池田佳介・阿部貴弘・篠原修：近世城下町大坂の下船場地区における城下町設計の論理，土木学会論文集，No. 758/IV-63，pp. 97-116，土木学会，2004
- 9) 志水昭太・牧田武・小林祐司・姫野由香・佐藤誠治：岡城と城下町の空間的特性に関する研究－全国の山城との比較を通して－，日本建築学会大会学術講演梗概集F-1，pp. 125-128，日本建築学会，2008
- 10) 九州大学文学部地理学研究室：近世都市 竹田－空間構成と都市のイメージ，1989
- 11) 鳥養孝好：旧城下町竹田の隧道，史学論叢，第28号，pp. 19-48，別府大学史学研究会，1998
- 12) 村松幸彦・野村瑞典監修：竹田の寺，p. 181，岡の里事業実行委員会，1994
- 13) 岡村香村：竹田奇聞(下)，p. 5，竹屋書店，1976
- 14) 竹田市教育委員会編集：中川氏御年譜(年譜)，p. 186，竹田市，2007
- 15) 竹田市教育委員会編集：中川氏御年譜(年譜)，p. 154，竹田市，2007
- 16) 賀川光夫監修：竹田市史(中巻)，pp. 179-180，竹田市史刊行会，1984
- 17) 岡村香村：竹田奇聞(上)，p. 43，竹屋書店，1976
- 18) 矢守一彦：城下町のかたち，p. 161，筑摩書房，1988
- 19) 阿部貴弘：近世城下町大坂，江戸の町人地における城下町設計の論理，p. 77，東京大学博士論文，2005
- 20) 竹田市教育委員会編集：中川氏御年譜(年譜)，p. 180，竹田市，2007
- 21) 竹田市教育委員会編集：中川氏御年譜(年譜)，p. 186，竹田市，2007
- 22) 村松幸彦・野村瑞典監修：竹田の寺，p. 181，岡の里事業実行委員会，1994
- 23) 竹田市教育委員会編集：中川氏御年譜(年譜)，p. 191，竹田市，2007
- 24) 九州大学文学部地理学研究室：近世都市 竹田－空間構成と都市のイメージ，p. 34，1989